

Title	自伝をパロディーする : George Thompson/Greenhornの技/擬法
Sub Title	Parody of autobiography, autobiographical parody : George Thompson's My life and The autobiography of Petite Bunkum
Author	白川, 恵子(Shirakawa, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.52 (2008.) ,p.39- 58
JaLC DOI	
Abstract	<p>One of the most prolific and popular sensational writers in the antebellum period is George Thompson (under the pseudonym Greenhorn), most of whose works are, nonetheless, obscured and ignored today. His harsh and ghoulish stories describe various kinds of crimes and moral deteriorations, for which he criticizes not only the lower rogues and swindlers but also the hypocritical upper class rakes and ecclesiastics. Thompson's critical eyes to reveal social evil also inform his autobiography, entitled My Life (1854).</p> <p>However, what is especially characteristic in his autobiography is not his flamboyant description of the dark side of antebellum city life, but his literary technique and self-confidence as a professional writer. Thompson theatrically exhibits himself as if he were himself a character in a novel, at the same time asserting "I" as an accomplished author; in doing so, he objectifies and subjectifies his own life. Parodying the moral norms of Benjamin Franklin, and sometimes railing against his enemies, he shows himself as a self-made man.</p> <p>His theatrical self-representation becomes much more apparent in another "autobiography": The Autobiography of Petit Bunkum, the Showman (1855). In this parody of P.T. Barnum, Thomson appropriates Barnum's life story, introducing the impresario's humbug spectacles in the first person narrative. What is more interesting is that Thompson makes himself appear in this travesty as "a petty swindler, 'publisher' and rival showman in the insignificant person of George W. Hiller," alias Greenhorn. In this vein, Thompson parodies/self-parodies the life of famous figures, and thus, displaces the literary genre of autobiography.</p>
Notes	

Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20080331-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自伝をパロディーする

——George Thompson/Greenhorn の技／擬法——

白 川 恵 子

I. 青二オトムソン

アメリカの南北戦争以前期に活躍した George Thompson (1823-ca. 1873) という名を聞いても、おそらく大方は、これが数多の煽情小説を出版した職業作家であったとは思うまい。同時代人としてむしろ有名なのは、イギリス議会メンバーであり、高名な奴隷廃止論者として William Lloyd Garrison と交友を結んだ同名の George Thompson (1804-1878) であろう。両者は、全くの別人であり、国籍の別はもとより、英国会議員といわゆる大衆小説を量産したもの書きとでは、あまりにも立場がかけ離れている。本稿が扱うのは、アンテベラムの大衆誌の編者兼作家として健筆をふるった、現在では無名に等しい文士である。このトムソンは Greenhorn というペンネームで煽情的かつエロティックな犯罪小説を発表し続け、こんにち現存するタイトルだけでも 60 作以上、恐らくは推定 100 作以上を創作した。彼は、最多産期の 1848 年から 1854 年までには 24 作以上、また 1855 年から 1858 年までには、少なくとも 12 作以上の新作を生み出したと言われている (Reynolds and Gladman xi, xiv-xv)。これらの作品は、当時広く大衆に流布したものの、読み捨てられ、忘れ去られた¹。

1 試みに、トムソン作品のタイトルの一部を列挙してみよう。New York

昨今、アンテバラムの大衆作家小説が同時代の文化や正典作家に与えた影響を指摘する批評の充実に伴い、トムソン作品のように、量産され、読み捨てられ、文学史上黙殺されてきた大衆作家作品群を、デジタル化して再現保存する動きが顕現化している。彼の作品について言えば、現在13点のテキストがインディアナ大学のデジタル・ライブラリー・コレクションのウェブサイト上に掲載されており、American Antiquarian Societyのアーカイブにも、デジタル化されていない何冊かのタイトルが確認できる。かつ2002年には、David S. ReynoldsとKimberly R. Gladman編により、トムソン作品の一部——具体的には、*Venus in Boston* (1849)、*City Crime* (1849)、*My Life* (1854)の3作——が再版され出版された。とはいえ、トムソンおよびその作品は、依然注目されるには至らず、批評に関しても、編集再版したレナルズとグラッドマン以外に、僅か数名の批評家が限定的な考察を試みるのみで、広範な研究対象とされているとは甚だ言いがたい²。

Life: or, The Mysteries of Upper-Tendom Revealed (1849), *The Countess, or Memoirs of Women of Leisure* (1849), *Jack Harold, or the Criminal's Carrier* (1850), *The Road to Ruin* (1851), *Harry Glindon, or the Man of Many Crimes* (1854), *Catherine, and Clara, or the Double Suicide* (1854), *Tom De Lacy, or the Convict's Revenge* (1855), *The Bridal Chamber, and its Mysteries* (1855), *The Mysteries of Bond Street; or, the Seraglios of Upper Tendom* (1857) と、作品の煽情的な内容は、十分に察しがつく。尚、その他のトムソンの筆による（あるいは、筆によると思われる）著作・著述のリストについては、Reynolds & Gladman pp.379-86を参照のこと。

- 2 筆者が知る限り、Reynolds & Gladman以外にトムソンについて批評しているのはChristopher LoobyとPaul Ericksonのみである。ただし、ルービーは*The House Braker*のみを分析しており、エリクソンは、Justin Jones、George Lippardとあわせてトムソンを考察対象としているため、作家および作品の総体的な批評としては、いずれも不十分である。トムソンの3作品を再版した編者の一人であるReynoldsは、アンテバラムの大衆文化・大衆作家がアメリカン・ルネサンスのいわゆる正典作家に与えた影響を分析した大著*Beneath the American Renaissance*において、トムソンをリップバードと並ぶsubversive/immoral reformerと位置づけて紹介しているもの

レナルズやグラッドマンも指摘するように、トムソン作品は、同時代の
大衆作家 George Lippard の作品と同様、エロティックな想像力と凄惨な
犯罪場面を駆使する煽情物語でありながら、そこには上層階級の欺瞞と、
権力者に抑圧される社会の最下層者（犯罪者を含む）の苦悩を暴露する
体制転覆的意識が窺える（“Introduction,” ix–liv）。だが、不思議なことに、
トムソンは、リップード以上に多産な作家であったにもかかわらず、文学
史上の、あるいは批評上の評価は、リップードに遠く及ばない。一つには、
夭逝したリップードのカリスマ的かつ新奇な人となりだが、作品への注目度
を高めたと考えられるのに対して、トムソンの「青二才の間抜け」という
ペンネームや、著者を明示しない出版形式による作家特定の困難さが、作
品の批評を困難にしてきたと推定できる。また、両者が、仮に同様の社会
批判をテキストにこめて作品を書いたとしても、独立革命に関する一連の
英雄伝説を執筆し、アメリカ初の労働組合 the Brotherhood of the Union
を組成した（Reynolds, “Introduction” *The Quaker City*, xvii）リップード
の、ある種の実質的堅固な社会改革意識に比べ、トムソンのそれは、徹底
的に風刺的かつジャーナリスティックな娯楽提示としてしか理解されず、
従って、読み捨てられるために書き捨てられた職業作家の大衆作品は、文
学批評の対象となり難く、それが両者の批評的評価の差異につながってい
るのかもしれない。

しかしながら、トムソンの二つの「自伝」を読むとき、そこには、単に
娯楽として読み捨ててはおけない彼の強烈なまでの自己喧伝とパロディー
の意識が窺える。 *My Life: or The Adventure of Geo. Thompson, Being the
Auto-Biography of an Author, Written by Himself* (1854) においてトムソ
ンは、アメリカ自伝ジャンルの規範となるフランクリンの道徳観を悉く擲

の、全体の割合から言って、ごく限られた頁しか割いてはいない。このよ
うに、トムソンに関する集約的情報は、作家自身の自伝から得られるそれ
と Reynolds & Gladman が提示するイントロダクション以外にはほぼ皆無
であるため、本稿で提示する情報も、それらに依拠していることを申し述
べておく。

揄えるかのように、放蕩、飲酒、不倫、殺人、復讐、自殺といった諸悪を列挙し、かつ自身の放埒な体験をあたかも全面的に肯定しているように見える。もちろん、この尊大な語りの自伝は、手本となるべき教訓の欠如もさることながら、そこに描かれた事件の信憑性そのものも甚だ疑わしい。なるほど、自伝が一種の物語^{フィクション}であるのは指摘するまでもなからうが、実際にポヘミアン文士や役者らと交流があったトムソンは、読者という観客に向けて、大仰な芝居の体験提示をしており、自身の放蕩の結末を肯定的に強調する自意識には、彼が数多創作した犯罪物語とその起源を一にする体制への抵抗精神の発露が散見される。さらにトムソンが、同時代人であり稀代のペテン師と言われた P. T. Barnum の自伝パロディー *The Autobiography of Petite Bunkum, the Showman* (1855) をも創作するとき、彼は、自身の人生のみならず、フリーク・ショウの興行師の人生をも劇化し、乗っ取ることによって、自伝ジャンルそのものを換骨奪胎し擲擧しているかのように思われる。本稿の目的は、これまで文学史上黙殺されてきたトムソンに注目し、その人生やテキストを劇場化・パロディー化する彼の手法を考察することにある。

II. トムソンの自伝を創作するトムソン

トムソンの自伝は、彼が30歳を過ぎた頃に書かれた半生記でしかないが、そのタイトルが示す通り、すでに波乱万丈の冒険の連続である。度重なる劇的な事件に、読者が訝るであろうことをトムソンは承知していたに違いない。彼は最終章にて “The reader may rest assured of one thing: —that *not one single word of fiction or exaggeration has been introduced into these pages*. Why should I wander in the realms of romance, when there are more startling facts at my command than I can possibly make use of? Is not truth stranger than fiction? Every day’s experience probes such to be the case.” (377 強調原文) と読者に語りかけ、自伝の信憑性を強調している。真偽の程はさておき、本作品には、煽情性および劇場性以外に

も、権威に対する抵抗・独立の気概や自己信頼といった作家の精神性が見出せる。以下、トムソンのテキスト特性を考察するが、まずは自伝の概要から始めたい。

幼くして両親を失い、叔父と叔母に育てられたトムソンは、彼らの横暴と虐待に耐えかねて、12歳にして叔父を殴り倒し、大怪我を負わせて家を飛び出す。独立自尊の精神を持ち、前途に明るい未来を夢見る彼の新たな人生は、だが同時に放蕩の始まりでもあった。家出直後に知り合った Jack Slack の手ほどきによって、トムソンは、酒を覚え、売春宿での一夜を経験し、前後不覚のまま拘置所で朝を迎える。このときジャックに Greenhorn と呼ばれたのが、作家のペンネームとなる。当初の意気投合は長く続かず、程なく二人は互いに憎しみあうようになる。トムソンは、後にジャックとの諍いで片目を失い、正当防衛とはいえ、この悪名高き詐欺師を殺してしまうことになるのであった。さて、職探しを始めた彼は、印刷業者の Romaine 氏の求人広告を見て、“I’ll be a printer! Franklin was one, and he, like myself, was fond of rolls, because he entered Philadelphia with one under each arm. Yes, I’ll be a printer!” (326) と考え、即座にその門を叩く。初めこそ真面目に働くのだが、トムソンの遊び癖は直らず、フランクリンの徳目とは正反対に、例えば、小遣い稼ぎのために、安息日を破り自作の新聞を作成販売したり、夜な夜な禁じられているはずの劇行通いを繰り返したりする。ある日、彼は、ひょんなことからロメイン夫妻が、それぞれ別の男女と二重不倫をしていることに気づく。二組の不倫を秘密にすることで優位に立ったトムソンだったが、結局はことが明るみに出る。ロメイン氏による妻とその相手男性の殺害、ロメイン氏の自殺という、三人の壮絶な死により、不倫劇の終焉と同時に、彼の印刷工の修行も15歳で終了する。

3年間のニューヨークでの放蕩生活を経て、18歳になったトムソンは、ニッカーボッカー誌等の刊行誌に寄稿する文筆を生業とするようになる。そんな折、彼は、偶然ロメイン氏の恋人であった Raymond 夫人に出会う。

彼女は、ロメイン氏との不倫顛末後、Livingstone 氏なる詐欺師に騙され、全財産を失う再度の不幸に見舞われたのであった。同情した彼は、リビングストンを追うレイモンド夫人に伴い、二人でフィラデルフィアへと復讐の旅に出る。身元を悟られないようにと男装した夫人と青二才に相応しい田舎者に紛争したトムソンは、各所で小騒動を起こし、時に旅芸人の一座に加わり、高名な役者との偽のふれこみと、誇大宣伝広告によって観客を騙しながら舞台興行を行い、金を稼ぐ。こうして何とかピッツバーグに到着した二人は、くだんの詐欺師を追い詰め、彼を殺して復讐を果たす。その後の裁判で、レイモンド夫人は2年間の服役を課されるものの、牢獄収監から9ヶ月目に、トムソンの助けで看守の目を盗み、逃亡に成功する。その後、トムソンは作家としてかなりの稼ぎをするようになり、また夫人は女優となり成功するのだが、不幸にも彼女は火事で顔に火傷を負い、それを苦に服毒自殺を遂げる。トムソンは、夫人の死後もチャールストン、ボストンにて大衆紙への執筆を重ね、National Theater の常連として多くの役者や文筆家と知り合い、Uncle and Nephew Club なる会を結成する。自伝の最後の数章は、こうした役者たちとの放埒な生活を、殺人事件に巻き込まれ刑務所に収監されたエピソードや、独立記念日前日の仮装祝宴での警察沙汰に発展する喧嘩騒ぎを交えて紹介し、仲間への謝辞と読者への挨拶で終わる。

本書においては、不倫の果ての痴情やら、詐欺師への復讐と殺人、服毒自殺と売春宿での放蕩、警察沙汰の騒動などの、一見反道徳的とも思われる事件が列挙されているが、彼の周囲で起こる重犯罪は、基本的には因果応報の結末によって幕を閉じるように描かれている。またレナルズも指摘するように、トムソンの憤りは、むしろ社会的権威者の偽善と弱者が抑圧される現実に向けられており、その意味において、彼の著作は、道徳的正義の喚起を意図する目的で創作されていると、一応は言えるだろう。例えば、トムソンは、弱者救済と慈愛を説くべき牧師の欺瞞を暴いている。説教もせず自宅に酒と煙草と放蕩三昧の生活を送る牧師は、赤貧の天然痘

患者を見舞うよう助けを求められても、感染を恐れてこれを拒否し、金で解決しようとする（348-49）。国政を担う政治家たちに対しても、彼らが酒場や売春宿で喧嘩や不品行を繰り返す様子を、作家は呆れ顔で報告し（343）、また、当時大衆の関心を喚起した高級娼婦 Ellen Jewett の殺害事件については、彼女の恋人であった殺害犯が、狡猾な弁護人の戦略によって無罪放免となる不正義に対し、“I do not believe that ever before was presented so shameful an instance of perverted justice, or so striking an illustration of the ‘glorious uncertainty of the law.’”（316）と述べ、法を操る権威者への憤怒を見せている。

このように、実際に起こった事件や、具体的な場所と人名を明らかにして自伝に臨場感を持たせるトムソンのテキストは、ジャーナリスティックであると同時に戯曲的效果もあげている。とみに顕著なのは、トムソンが次々と起こる事件や出来事をシェイクスピア劇との関連で語っている点である。例えば、当時“the William Street Tragedy”と呼ばれ、大衆の関心を惹いたロメイン夫妻のダブル不倫の顛末を、安新聞の記事が“a perfect modern tragedy of Othello, with Romaine as the More, Mrs. Romaine as Desdemona, and Anderson as a sort of cross between Iago and Michael Cassio”（337）と書き立てたと紹介する。また舞台役者以上に壮麗な男装のレイモンド夫人に、村娘が恋をして関係を迫るコミカルな場面は、まさに『十二夜』そのものであり（355-56）、その後実際に女優になったレイモンド夫人がデビューを飾ったのは、『恋のから騒ぎ』であるとの説明が付される（366）。さらに自伝終結間際の独立記念日前夜の仮装騒ぎの場面では、フォールスタフの衣装を身につけたトムソンと、リチャード、オセロ、マクベス、ハムレット、シャイロック、リア王に扮した仲間たちとの騒動、および酒場での喧嘩の果てに投獄される様を喜劇的に描いている（373-76）。

自伝にアンテベラムの煽情的ジャーナリズムと大衆の演劇文化受容を直接的に書き込んでいるのに加えて、トムソンは、出版と舞台、また小説家

と役者とが緊密かつ相互依存的関係にあると指摘している。

There is an intimate connection between the press and the stage that is a congeniality of character, habit, taste, feeling and disposition, between the writer and the actor. The press and the stage are, in a measure, dependent on each other. . . . There is one point of resemblance between the hero of the sock and buskin and the Knight of the quill. The former dresses up his person and adopts the language of another, in order to represent a certain character; the latter clothes his idea in an appropriate grab of words, and puts sentiments in the mouths of his characters which are not always his own. (371)

役者が他者を演ずる行為と、作家が自身の思索を作中人物に語らせる行為との相同を、自伝という表現形態において語るとき、トムソンにとって、テキスト内で自身を語り、また同時にテキストに登場する自分に自身を提示させる行為は、己を主張しつつも、己を他者化し、異化することになる。こうした自と他との境界不可分性、あるいは書く行為と演ずる行為とのそれは、自伝テキストの真偽とも共鳴しあい、テキストという枠組み内部で行われる彼の自己喧伝をより際立たせることになる。換言すれば、筆者である「私」＝トムソンが、登場人物としての「私」＝トムソンを自伝の枠組み内に配置することによって、依存と独立という一見相反する立場を不可避につないでいることになるのである。

トムソンのこうした演劇的な自己提示の意識は、本テキストの構成にも見出せる。出自と生い立ちから自伝執筆当時の現状までを説明するテキストの前後には、それぞれ“INTRODUCTION in which the author defineth his position”と題するいわゆる前口上部分と、“CONCLUSION My Parting Bow”という謝辞および読者にむけての送別の辞が配置されている。つまり本自伝の構造そのものが、トムソンによって設定されたい

わば額縁舞台の枠組みのなかで展開されていると言ってよい。さらに注目すべきなのは、これら自伝本文の前後の序章と結びにおいて提示されている、彼の尊大とも思しき自己顕示である。序の書き出しは、以下のように始まっている。

It having become the fashion of distinguished novelists to write their own lives—or, in other words, to blow their own trumpets,—the author of these pages is induced, at the solicitation of numerous friends, whose bumps of inquisitiveness are strongly developed, to present his autobiography to the public—in so doing which, he but follows, the example of Alexandre Dumas, the brilliant French novelist, and of the world-renowned Dickens, both of whom are understood to be preparing their personal histories for the press.

Now, in comparing myself with the above great worthies, who are so deservedly distinguished in the world of literature, I shall be accused of unpardonable presumption and ridiculous egotism—but I care not what may be said of me, inasmuch as a total independence of the opinions, feelings and prejudices of the world, has always been a prominent characteristic of mine—and that portion of the world and the “rest of mankind” which does not like me, has my full permission to go to the devil as soon as it can make all the necessary arrangements for the journey. (313)

自身をデュマやディケンズになぞらえることも辞さず、また他者の敵意も意に介さず独立自尊を貫く姿勢は、結びの章にも同様に見出せる。才能のない作家連中と自身とを対比的に提示しつつ、批判中傷に屈することなく、あくまで自主自立の道を行くと堂々と語っているのだ。

I have many bitter enemies, and they will, I presume, continue to snarl at my heels like mongrel curs. Their miserable attempts to insure me will only rebound back upon themselves. I am above the reach of their malignity, and shall pursue my own independent course regardless of their spleen.

. . . I, shall always, as heretofore, labor to produce that which is interesting, exciting and founded on truth, and entirely unobjectionable in a moral point of view. Unlike many so-called writers who throw off a quantity of trash and care not how it fills up space, I am always willing to bestow time and toil upon my work, for the sake of my own credit, for the purpose of securing the rapid and extensive sale of the book—and in order to give the public perfect satisfaction. (378)

己が才覚に対する自尊と自立心は、このように、無能なものの書きを批判するくだりに明白に見出せるが³、トムソンは、言うなれば、作家としての自身の立場を明示する宣言文を、序と結に設置しているのである。

一方、トムソンは、こうした枠組の内側の自伝本論部分においても、同様に、権威に対する抵抗と強い自我を発露させている。自伝第一章冒頭にて、彼は“I determined to rebel against the authority of my beloved kindred, assert my independence, and defend myself to the best of my ability.”と語り、叔父と叔母と従兄弟の虐待に対して、“Let any of you

3 トムソンは、序においても、才能のないものの書きの厚顔を、次のように指摘し、揶揄している。“I have seen writers of no talent at all—petty scribblers, wasters of ink and spoilers of paper, who could not write six consecutive lines of English grammar, and whose short paragraphs for the newspapers invariably had to undergo revision and correction—I have seen such fellows causing themselves to be invited to public banquets and other festivals, and forcing their unwelcome presence into the society of the most distinguished men of the day” (313).

three tyrants touch me, and I'll show you what is to get desperate. I disown you all as relatives, and hereafter I'm going to live where I please, and do as I please.” (317) と、まさしく独立を宣言する。家出後、空腹で折からの雨に濡れながらも彼は確信する。

I was well aware of the fact that I was no fool, although I had often called one by my hostile and unappreciating relatives, whose opinions I had ever held in most supreme contempt. As I stood under that tree to shelter myself from the rain, I felt quite happy, for a feeling of independence had arisen within me. I was now my own master, and the consciousness that I must solely rely upon myself, was to me a source of gratification and pride. (318)

若干 12 歳にして顕示された、彼の抵抗と自尊の精神は、最終章の独立革命記念日のエピソード、すなわち “an original Fourth of July poem” の内容とも呼応しあう。前日の仮装騒ぎにより監獄に収監されたトムソンは、釈放後、猛烈な勢いで、役者が独立革命祝賀祈念の舞台上で朗読するための詩を創作する。わずか 45 分で書き上げた作品の出来は、素晴らしく、好評を博す。テキスト内に実際の詩は紹介されていないが、その内容をトムソンは、以下のように述べる。

I had avoided the usual stereotyped allusions to the “star spangled banner,” to the “Ameri-eagle,” to the “blood of our forefathers,” &c; —and had dwelt principally upon the sublime moral spectacle afforded by an oppressed people arising in their might to throw off the yoke of bondage and assert their independence as a nation. (377)

アメリカそのものの建国史に合致するかのよう、トムソンの人生は、自

伝冒頭において、暴君たる親族を打ちのめすという反逆の行為で始まったが、その抵抗と独立の気概は、自伝終結部の7月4日の祝賀記念日に、抑圧された民衆内部から湧き上がる抵抗の精神を写し取る非凡なる筆力への賛辞をもたらすのである。

このように、トムソンの放蕩と冒険の果ての成功、ひいては己が筆力への自己顕示が、作家としての宣言文と、作家が演出する人生体験の提示という二重構造によって劇的に語られるとき、そしてとりわけ、その作家宣言において、彼の作品創作の姿勢が“I, shall always, as heretofore, labor to produce that which is interesting, exciting and founded on truth, and entirely unobjectionable in a moral point of view.” (378) と表明されるとき、自らを皮肉にも青二才と名づけたトムソンの『我が人生』は、単に大衆の興味を惹く煽情的事件を列挙した娯楽を提示する以上に、作家の技法と揶揄の才を示して止まぬ自己喧伝の書としてたち現れることになるのである。

III. バーナム／バンカムの自伝を執筆するトムソン

『我が人生』という戯曲的枠組みを持つ自伝テキストにおいて、登場人物としての「私」を演出すると同時に、作家としての「私」を主張するトムソンは、次作の「自伝」において、他者の人生を創作し、その内部に自身をキャラクターとして登場させるというアクロバティックなパロディーを展開することになる。それがP. T. バーナムの自伝のパロディー *The Autobiography of Petite Bunkum, the Showman* (1855) である。

『我が人生』と同年の1854年に執筆された『興行師プチ・バンカムの自伝』は、巻末に付された編者の言のとおり、偉大なるヤンキー興行師P. T. バーナムを風刺するために書かれたテキストである (“Note” 65)。本書は、翌年の1855年、バーナム自身の自伝 *A Life of P. T. Barnum, Written by Himself* (1855) に先んじて出版されたが、レナルズとグラッドマンによると、バーナムはこの本の出版差し止めを申請したという。た

だしそれは、バーナムが、自分を揶揄する内容に腹を立てたからというよりも、自身の自伝出版以前に世に出た本書に対して、販売を競うことを危惧したからであったらしい (xxxii)。

「偉大なるヤンキー興行師 P. T. バーナム」ならぬ「些末なたわ言」を意味するバンカムの自伝には、その表紙も含め、トムソンの名は一切記載されていない。もちろんこれが明らかに本物のバーナムを風刺するテキストであるの是一目瞭然なのだが、バンカムの名を付して掲載されている出版社 P. F. ハリス社との出版に関する表紙裏の契約のやり取りや、The Swedish Nightingale への献辞、また、“Publishers Notice” から “Author’s Preface” さらには、editor によって書かれた巻末の “Note” に至るまで、本書は、正統な自伝形式を踏襲して巧みに作り込まれており、だからこそバンカムなる人物自身が自伝を執筆したかのような、あるいはあたかもバンカムの名の下で、だれとも分からぬ筆者が、本家本元のバーナムの自伝を乗っ取ってしまったかのような印象を読者に与えるのである。その概要は、表紙に記された長いタイトルが示す以上でも以下でもない。要は、バンカムが、いかにして親指トムやワシントン大統領の 161 歳の元乳母、歌姫ナイチンゲール、フィジーの人魚、羊馬、珍奇珍獣の類を見つけ出し、それらを入手し、観客を煙に巻きつつ娯楽を提供して成功したのかを描いている。つまりトムソンは、金儲けのためになら、いかなる捏造も辞さないバーナムの姿勢を戯画化したわけだが、彼は、“Humbug is the order of the day” (*My Life* 357) という当時の風潮を熟知して上で、山師の成功の実態を紹介するという何とも皮肉な「些末なたわ言」を創作したのである。

事実、「些末なたわ言」というタイトルにふさわしく、既にバーナムの偉業を知るアンテベラムの読者にとって、あるいはまた、バーナムの伝記を知るこんにちの読者にとって、ここには、特に新規で物珍しい事柄は見あたらない。だが、トムソンの名をどこにも付さず、バンカムなる人物の自伝という形式を貫くことで、一見、謙虚を装う作家が、別の形で自己主張をする点にこそ、本書の面白みがある。それは、本来大衆を騙す側であ



図版1『バンガムの自伝』の挿絵より

るはずのバンカムが、とある紳士に騙されてしまう逸話の中に見出せる。あるときバンカムは、某紳士のほら話を信じ込み、軍服姿の美女集団の興行で一儲けしようと目論んで、大々的な宣伝を打ち、観客を集める。ところが、結局その美女集団は、待てど暮らせど姿を現さず、バンカムは、黒山の人だかりともども、待ちぼうけを食わされて終わる。この折に集まった人々のなかに、トムソンは、自身を登場させているのだ。作家は以下のように語る。“All classes of people were there represented, from the Wall-street millionaire down to a petty swindler, “publisher,” and rival showman in the insignificant person of *George W. Hiller*” (53 強調原文)。ここで Hiller と名づけられた人物は、けちな詐欺師であり、出版業者であり、バンカムのライバルの山師として造形されており、Ned という酒呑男に “Greenhorn” と呼ばれ、追い払われる (54)。

興味深いのは、本書において、「青二才」と呼ばれたヒラーが、このエピソードとは全く無関係の図版とキャプションとともに掲載されている点である (図版1)。図版1には、““Greenhorn,” having triumphed over



図版2 『ブロードウェイ・ベル』紙上のトムソン

all his enemies, and trodden them in the dust beneath his feet, begins to ascend the steps leading to the Temple of Fame.” (55) との説明が付されている。スリを働こうとして失敗し、物語上からすごと姿を消した「青二才」は、しかしながら、少なくともこの挿絵に関する限り、威风堂々と「名士の殿堂」へと続く成功の階段を上がっていくことになる。実は、このヒラーの挿絵は、1855年2月12日号の *The Broadway Belle, and Mirror of the Times* 紙上に掲載されたトムソンの姿と同じものなのである。しかも、このときの『ブロードウェイ・ベル』紙の図版キャプションには、“Our former Editor, George Thompson, Esq., on seeing by the daily papers the report that he was arrested and held to bail in \$500, (being the first he had heard of it,) proceeds to the Tombs to ascertain what all the noise is about. While ascending the steps, he keeps a sharp look-out for Monsieur Taglioni.” (Reynolds & Gladman xviii) とのバンカムの自伝とは違った説明が記されている（図版2）。

当然ながら、これには事情がある。トムソンが編集・論説を担当して

いた『ブロードウェイ・ベル』紙は、煽情的な記事を掲載する大衆紙であったのだが、かなりきわどい内容のために、平素より当局に注目されていた。そんな折、1月30日付けの *The New York Daily Tribune* 紙に誤報が掲載される。それによると、『ブロードウェイ・ベル』紙が掲載した“Important to Husbands and Wives”と題する猥褻記事に対して、当局が出版者 P. H. Harris 氏ならびにトムソンを逮捕したと言うのである。これを読んだトムソンは、ことの真相を確認すべく、自らニューヨーク市刑務所へ出頭する。図版2は、そのときのトムソンの様子を描いたものである。結局、問題となった猥褻記事は、トムソンの筆によるものではなく、別人の記事であることが判明し、二人は起訴を取り下げられたのだが、この騒動が、からかい半分で、『ブロードウェイ・ベル』紙上で取り上げられたのは言うまでもない (Reynolds & Gladman xv-xviii)。

トムソンは、バーナムの伝記パロディー執筆時に用いたこの挿絵をそのまま掲載し、自身の正当性と当局の無能を揶揄すべく、また同時に自己喧伝すべく、キャプションを書き換えたと考えられる。煽情紙の逮捕騒動の偽記事顛末と、見世物の興行師の自伝パロディーとを自身の挿絵によって結びつけるトムソンの風刺によって、作家特有のテキスト構造上の技法、および彼の特異な精神性が前景化されているように思われる。トムソンは、自伝という文学ジャンルが、ややもすれば小説以上に劇的な創作分野である事実を、バーナムの自伝をバンカムバンカムの自伝に、さらには、彼自身の体験へとずらしていく行為によって、示したのである。その過程で、作家は、バンカム、すなわちバーナムと自身とを同列に置き、自他双方の山師ぶりを揶揄しているのである。トムソンが、フリーク・ショウの興行師バーナム本人の自伝に先駆けてその人生を脚色提示するとき、しかもその内部に明らかに作家自身と分かる詐欺師を登場させるとき、バーナムのみならず、作家自身もがパロディーの対象となってしまうからだ。トムソンが行っているのは、煎じ詰めれば、バーナムの名声に依拠し、彼の「自伝」を創作することによって成される自己喧伝である。しかも贗バーナムの自伝にお

いてキャラクターとして登場する詐欺師は、実際に当局に逮捕されたと誤認されたのだから、本書が「些末なたわごと」どころか、現実と虚構とを不可分に結びつつ、同時に幾重にも重なる風刺を提示しているのは明らかである。もちろん、こうした揶揄が可能になるのは、良くも悪くもバーナムとトムソンが世の注目を集める存在であるからに相違ない。だからこそトムソンは、自立自尊に裏打ちされた自虐的パロディーによって、数多存在する敵を、洒落のめす才覚こそが、the Tomb から the Temple of Fame へとつながる上昇階段を登るに足るのだと主張しているのである。

バーナムは1855年に最初の自伝を出版した後、1869年に二作目の自伝 *Struggles and Triumphs: Or, Forty Years' Recollections of P. T. Barnum* を上梓する折に、一作目の印刷版を敢えて破砕した。Browneによれば、バーナムは自伝を書き換えるたびに、自身を成功者として提示する意図を鮮明化していったとのことである (vii)。一方、バーナムに勝るとも劣らぬ苛烈な自己喧伝の意識をもったトムソンは、しかしながら、自身の自伝を書き換えるよりも、他者の自伝を乗っ取り、劇化し、パロディー化するという斬新な方法を選んだ。何十にも及ぶ煽情小説において、猟奇的犯罪やおどろおどろしい殺害現場、あるいはまた肉欲と支配欲といった反道徳的側面をあからさまに描いたトムソンは、“In the lively competition among antebellum fiction writers to outdo one another’s disgusting images, Thompson was the clear winner, with George Lippard a distant second, and Poe, for all his horror, almost out of the running, trailing perhaps a score of anonymous and pseudonymous sensational novelists.” (Reynolds & Gladman xxxiii) と評されたが、これらの小説に匹敵する煽情的な「自伝」をトムソンは創作したと言えるだろう。

Works Cited

- Barnum, P. T. *The Life of P. T. Barnum, Written by Himself*. NY: Redfield, 1855.
Browne, Waldo R. ed. *Barnum’s Own Story: The Autobiography of P. T. Barnum*,

- Combined & Condensed from the Various Editions Published during His Lifetime.* Gloucester: Peter, 1972. vii–viii.
- Erickson, Paul. “New Books, New Men: City-Mysteries Fiction, Authorship, and the Literary Market.” *Early American Studies* (Spring 2003): 273–312.
- Looby, Christopher. “George Thompson’s ‘Romance of the Real’: Transgression and Taboo in American Sensational Fiction.” *American Literature* 65. 4 (Dec., 1993): 651–72.
- Reynolds, David. *S. Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville.* Cambridge: Harvard UP, 1988.
- , ed with intro. *The Quaker City, or the Monks of Monk Hall.* Amherst: U of Massachusetts P, 1995. vii–xliv.
- Reynolds, David S and Kimberly R. Gladman, eds with intro. *Venus in Boston and Other Tales of Nineteen-Century City Life.* Amherst: U of Massachusetts P, 2002.
- Thompson, George. *The Autobiography of Petite Bunkum, the Showman; Showing his Birth, Education, and Bringing up; His Astonishing Adventures by Sea and Land; His Connection with Tom Thumb, Judy Heath, the Woolly Horse, the Fidge Mermaid, and the Swedish Nightingale; Together with Many Other Strange and Startling Mates in his Eventual Career; All of which are Illustrated with Numerous Engravings. Written by Himself.* New York: P. F. Harris, 1855.
- . *My Life: or The Adventure of Geo. Thompson, Being the Auto-Biography of an Author, Written by Himself.* 1854. *Venus in Boston and Other Tales of Nineteen-Century City Life.* Eds. with intro. David S Reynolds and Kimberly R. Gladman. Amherst: U of Massachusetts P, 2002, 313–78.

Synopsis

Parody of Autobiography, Autobiographical Parody:

George Thompson's *My Life* and *The Autobiography of Petite Bunkum*

Keiko Shirakawa

One of the most prolific and popular sensational writers in the antebellum period is George Thompson (under the pseudonym Greenhorn), most of whose works are, nonetheless, obscured and ignored today. His harsh and ghoulish stories describe various kinds of crimes and moral deteriorations, for which he criticizes not only the lower rogues and swindlers but also the hypocritical upper class rakes and ecclesiastics. Thompson's critical eyes to reveal social evil also inform his autobiography, entitled *My Life* (1854).

However, what is especially characteristic in his autobiography is not his flamboyant description of the dark side of antebellum city life, but his literary technique and self-confidence as a professional writer. Thompson theatrically exhibits himself as if he were himself a character in a novel, at the same time asserting "I" as an accomplished author; in doing so, he objectifies and subjectifies his own life. Parodying the moral norms of Benjamin Franklin, and sometimes railing against his enemies, he shows himself as a self-made man.

His theatrical self-representation becomes much more apparent in another "autobiography": *The Autobiography of Petit Bunkum, the Showman* (1855). In this parody of P. T. Barnum, Thomson appropriates Barnum's life story, introducing the impresario's humbug spectacles in the first person

narrative. What is more interesting is that Thompson makes himself appear in this travesty as “a petty swindler, ‘publisher’ and rival showman in the insignificant person of George W. Hiller,” alias Greenhorn. In this vein, Thompson parodies/self-parodies the life of famous figures, and thus, displaces the literary genre of autobiography.